

### c. 現在の多様化

そのようなわけで、今日、分裂は別の性格のものになっています。それは、19世紀以来の、フランス・プロテスタンティズムの漸進的な多様化によるものです。16世紀の宗教改革以来存在した、改革派とルター派の歴史的教会に、19・20世紀になってから次第に、他の起源、一般的にはアングロ・サクソン起源の、様々なプロテスタントの教会や共同体 (communautés) が加えられていったのです。その中には救世軍やバプテスト、ペンテコステ、また「福音派 (évangéliques)」といわれる諸共同体を数えることができます。バプテストは一万五千人を集めています。既に述べましたように、バプテストは「告白者 (professants)」の教会ですから、ただ四千五百人だけが真の会員と言えるでしょう。フランスでは、この教派は、シノッドの組織がなく分散的であり、会衆主義的傾向を持つ共同体です。伝道に専心し、熱烈な敬虔をそのなかに維持しています。

それ故、今日、フランスのプロテスタンティズムを分ける大きな違いは、教理の相違ではなく、敬虔の形態と宗教的感性に基づくものであるように思えます。改革派とルター派は、多少ピューリタンのであり、信仰の表現と敬虔において幾分冷淡であると見られており、これに、様々な共同体、とりわけバプテストや福音派が対立しています。後者は、今日、プロテスタント人口の4分の1から3分の1を占めており、おそらく伝統的教会よりも活力に溢れているでしょう。信仰の表現 (特に礼拝) においてより積極的であり、伝道において直接的です。信仰の知的側面以上に感情的側面を重視し、ラジオやポピュラー音楽といった現代のメディアの使用に親和的です。これらの教会は、「歴史的」、すなわち伝統的教会が有する過去の伝統や遺産や記憶を分有せず、そのことは、彼らにより大きな柔軟性を与えていますが、その一方で、「歴史的」教会が社会において既に得ている名声も共有してはいません。

最後に、この二つの傾向への多様化は、必ずしもフランス・プロテスタンティズムの完全な分裂を意味するものではないことを、つけ加えておきましょう。信徒が、ある教会のタイプから別のタイプへ移ることは、かなり頻繁に見られます。ま

た、これらすべての教会や共同体が、1909年以来存在する、「フランス・プロテスタント連盟 (Fédération protestante de France)」とよばれる制度に結びついています。これについては、第2部で語ることにします。

ところで、まだひとつ、論ずべき事が残されています。教会の2つのタイプは、それぞれ、もう一方のタイプに欠けている性質を持っているのではないか、ということです。歴史的な、改革派教会とルター派教会は、互いに結合し、豊かな過去を持っており、堅固です。これらの教会は、国の中で名声を得ています。他の諸教会や共同体は分裂し、活動的ではありますが、より不安定です。フランスにおいては、世論により、しばしばカルト (secte) に同一視されますが、これはわが国では深刻な非難を意味します。

## 2. 現在直面している挑戦と、 将来への展望

私たちが、プロテスタンティズムの将来を問うために、その現状を検討しようとするなら、ここで再び、少数派であるという事実から始めるのがよいでしょう。この事実を、二つの側面から考察することが出来ます。第一に、信徒、すなわち新たな信徒の獲得と、その具体的生活について。第二に教会組織とメッセージについてです。

### A. 信徒と、教会員の構成の観点

フランスのプロテスタントが少数派であるのは、カトリックが多数派であり続けている社会においてです。従って、プロテスタンティズムの未来は、過去と同様に、回りのカトリックとの関係にかかっています。過去の諸世紀においては、2種類の関係が存在しました。第一に、闘争の関係です。カトリック教会は、プロテスタンティズムを、制限・排除するために、国家に支持を求めました。この関係は19世紀まで続きましたが、結局プロテスタンティズムは勝利しました。というのは、政教分離が、カトリック教会の支配的地位を失わせ、プロテスタンティズムに有利に働いたからです。

続いて、19世紀末から、競争の関係へと変わり